

行には之を用ひず。回光返照して、本有の自性を知見するを、慧眼と名く。見性の後は見聞覺知も、也た受用すべし。」

問うて曰く、「本有の自性を知見すといふは、知見は知るべし、本有の自性といふは如何。」

答へて曰く、「一切衆生本來性あるが故に、自體を扶起す。此の性無始より以來、不生不滅、無色無形、常住不變なり、是れを本有の自性と名く。此の自性は、一切諸佛と一味平等なるが故に、佛性と名く。一切の三寶、六道の衆生も、此の性を以て根本として、一切の法を成就す。」

問うて曰く、「回光返照といふは如何。」

答へて曰く、「外の諸法を照す、自己の光明を回らし返して、内の自己を照すを云ふなり。心明かなること日月の光の如く、無量無邊にして、内外一切の國土を照す。光及ばざる處は闇し、是れを黒山の鬼窟と名く。一切の鬼神、其の内に住す、鬼神はよく人を害す。心法も亦復た是の如し。心性の智光は、無量無邊にして、一切の境界を照す。光及ばざる處は闇し、是れを無明の陰界と名く。一切の煩惱、其の内に住す、煩惱よく人を害す。智心は光なり、妄念は影なり。光の物を耀すを照と云ふ。心念の境界に遷らずして、本性に向ふを回光返照と言ふ、又は遍照とも言ふ。遍照の當體は、迷悟未

⑩十地等覺、等覺は菩薩の最上位にして直に佛位に次ぐ、十地は等覺に次ぐ菩薩の位なり。  
⑪黒山の鬼窟、鐵圍兩山の間日月の光を見ず、餓鬼其の中に集りて宿債を償ふと。

だ露はれざる處なり。今時の人は、妄念を以て本心と思ふ、煩惱を以て樂とす。何れの時か生死を離れんや。」

問うて曰く、「坐禪は一念不生を以て省要となす。念を以て念を止むれば、即ち是れ血を以て血を洗ふに似たり、如何。」

答へて曰く、「一念不生は所謂心法の本體なり。念を止むるにもあらず、又念を止めざるにもあらず、但た是れ一念不生なり。若し此の本體に合ひぬれば、是れを法性の如來と名く。然るときんば坐禪も亦無用なり。迷もなく悟もなし、豈に念あらんや。若し此の本體を知らずんば、不生を得べからず。縦ひ念を押へて起さずと雖も、皆是れ無明なり。譬へば石の草を壓して久しからずして又生ずるが如し。綿密に工夫すべし、容易なるべからず。」

問うて曰く、「或人云ふ、『當に一念不生の處に向ふべし』と、如何。」

答へて曰く、「一念不生とは、全く生滅去來の相なきを指示する語なり。生死は念より起る、若し念の起る處を知らずんば、生死の根本を知るべからず。衆生は十二時中、煩惱の念に使はれて、本有の性に背く。若し復た妄念の雲晴れて、心性の月彰るれば、已前憎む所の念、還つて皆智慧となる。乃ち此の念を以て說法して、衆生を教化すべし。古人の云く、『諸人は十二時に使はる、我れは十二時

⑫坐禪。坐禪の方法は半結跏、兩結跏等ありと雖も、要は心頭一念何の處にありても諸處を一所に別することに外ならざるなり。  
⑬古人の云く云々。是れ趙州和尚の語なり。

を使ひ得たり」と云々。

問ふ、「坐禪の時は、念起るも過、止むるも又過と云ふ、如何。」

答ふ、「未だ見性せざる時は、起るも止むるも皆過なり。佛經に或は不起妄念と説き、或は亦不息滅と説けるも、皆是れ本性を知らしめんがための語なり。本性を知るときんば、修行も無用なり、迷妄の病除くときんば、療治も無益なり。然りと雖も、迷情の病起るときんば、修行の療治を用ふ。念起るは病、續がざるは藥なり。」

問うて曰く、「縦ひ念起ると雖も、念には自性なし、何の過かあらんや。」

答へて曰く、「自性なしと雖も、起れば便ち過あり。猶ほ夢中の事の如し、覺めて後其の虛妄なるを知る、豈に過なしと云はんや。過を起し夢を成すは、衆生の妄見なり。一旦佛法を聞いて信心を起すは、殊勝の事なり。然りと雖も、眞實道心なき人は、工夫疎なるに由つて、心の過を知らず。偶々小々の念を押せども、大々の念を知らず、若し根源を截らすんば、縦ひ結縁の分ありと雖も、生死を出離し難し。」

問うて曰く、「一切の善惡、すべて思量することなけれ云々。善惡に付いて思量することなきを、尤も坐禪の用心となす。小々大々の念と云ふは如何。」

答へて曰く、「一切の善惡、すべて思量すること莫れと云ふは、直截の語なり。坐禪の時ばかり、之

を用ふべきにあらず。若し此の田地に到らば、行住坐臥皆禪なり、必ずしも坐相を執せず。祖師の云く、「行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜、體安然」と。佛經に云く、「常に其の中に在りて、經行若しくは坐臥す」と云々。小々の念といふは、目前の境界に付いて俄に起る念なり。大々の念といふは、

貪欲、嗔恚、愚痴、邪見、憍慢、嫉妬、名聞、利養等の念なり。坐禪の時志薄き人は、小々の念を收むと雖も、此の如きの惡念、覺えずして心中に在り。是れを大々の念と名く。此の惡念を棄捨するを、直に根源を截ると名く。直に根源を截るときんば、煩惱も菩提となり、愚痴も智恵となる。三毒も三聚淨戒となり、無明も大智法性となる。いかに泥んや小々の念をや。佛語に「若し能く物を轉せば、即ち如來と同じ」といふは此の意なり。但だ能く物を轉すべし、物に轉せらるゝこと莫れ。」

問うて曰く、「若し能く物を轉すれば、即ち如來と同じといふは、物とは何物ぞ、轉するとは何事ぞ。」

答へて曰く、「物とは萬物なり、轉するとは體脫なり、物を轉するとは一切の境界に就いて心を遷さず、返つて本性に向くるなり。境、心を礙へざれば、天魔鬼神、煩惱生死、便を得べからず、是れを物を轉すと云ふ。物に於て心を遷さず用心するなり。佛見法見、尙ほ以て截るべし、いかに

- ① 田地は境界なり。
- ② 永嘉眞覺大師なり、此の句は證道歌にあり。
- ③ 經行。坐禪の時睡眠を防ぐために一定の場所をめぐりあること。
- ④ 三毒。貪慾、嗔恚、愚痴の三煩惱のこと。
- ⑤ 三聚淨戒。攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒なり、大乘一切の戒法を此の三に總攝す。
- ⑥ 無明。一切の煩惱のこと。
- ⑦ 佛見は、佛に執着すること。

況んや妄念をや。截る心も念の心に似たりと雖も、是れは正念なり。正念をば惠念と名く、是れは正見に入る智恵なり。」

問うて曰く、「煩惱も菩提も、一心より起ること分明なり。何れの處よりか起り始まるや。」

答へて曰く、「色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を嘗め、觸を覺え、法を知るは、六根の徳用なり。此の境界に附いて、善惡を分ち、邪正を辨する底は智恵なり。此に於て人我を立し、愛憎を起すは皆妄見なり。此の妄見に依つて、着相をなすを迷と名く。此の迷より色受想行識の五蘊を起す、是れを煩惱と名く。煩惱を以て衆生の身體を建立するが故に、殺生、偷盜、邪淫、妄語等の惡行を好んで、終に三惡道に墮す。皆是れ妄念より起る。此の妄念緣かに起る時、直に妄念を轉じて本性に向へば、即ち無心となる。已に無心に安住するを得れば、五蘊の身、即ち五分法身の如來となる。是れを應無所住而生其心と謂ふ。是の如く用心すれば、修行の大用なり。」

問うて曰く、「久しく坐禪の功を積んで、工夫純熟する人は、煩惱邪迷の心あるべからず。始めて修行をする人、争か煩惱を盡すべきや。」

答へて曰く、「煩惱をも厭はず、只だ心を淨むべし。古人の云く、『學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に着けて便ち判す、直に無上菩提に趣んで、一切の是非管すること莫れ』と。手を心頭に著けて心の邪正を批判し、心の誤りを知るべきものを智者と名く。若し智恵ありて迷無くんば、譬へば昔より日月の光を入れざる闇穴に、燈を入るゝが如し。而も昔の闇、外邊に去らざれども、俄に明となる。無明煩惱の闇、智恵の光を得れば、去るを待たずして而も去るなり。夜は虚空闇し、然りと雖も、日光現するときは、其の虚空、晝となりて明かなり。心法も亦復た是の如し。迷は暗なり、悟は明なり。智恵の光照すときんば、煩惱の暗忽ち明となる。菩提別に二法あることなし。」

問うて曰く、「煩惱の闇を照すは、智恵の力による。智恵無うして菩提あるべからず。然るときんば争か此の智恵を得べき。」

答ふ、「自己の智光は、自ら明々たり。然りと雖も妄想に覆はれて之れを失す。是の故に迷を起す。譬へば人の夢を見ると、何事も眞實の相をなす、覺めて後、一事もなきが如し。夢の如くなる妄想、覺めて後之れを見れば、もとより之れなし。衆生は迷へる故に、妄を以て實となす。」

問ふ、「悟とは日比知らざること俄に之を知り、過去未來の事も知るべきや否や。」

答ふ、「妄見皆盡くれば、大夢俄に覺めて佛性を知見す。是れを大悟大徹と名く。是れ等は思量分別

法見は法に執着すること。  
①六根。眼、耳、鼻、舌、身、意なり。  
②三惡道。地獄、餓鬼、畜生の三道なり、此の三道は迷界の六道中に於ても特に苦患多き故に惡道と稱せらる。  
③五分法身とは戒身、定身、惠身、解脫身、解脫知見身を云ふ。  
④應無所住而生其心。金剛經莊嚴淨土分第十に出づ、六祖大師未だ出家せざる時、市に於て一僧の此の句を誦するを聞きて省悟すといふ。

⑤鐵漢。意志の強剛なるを云ふ、漢は人に同じ。  
⑥智恵。般若の正智恵にして、一切の迷惑愚痴を離れたる佛智見をいふなり。

の測らざる處なり。過去未來の事、識るは、神通力なり。其れ修行勳力に因る、大悟と謂ふべきにあらず。天魔、鬼神、外道、仙人等も、皆是れ神通あり。昔曾て難行苦行を修せし徳なり。此の徳ありと雖も、邪見を離れざれば、佛道に入らず。」

問ふ、「悟道得法の人、神通を具せずんば、則ち何の徳用かありや。」

答ふ、「此の身は過去の愚迷を以て建立する故に、縦ひ見性成佛の人と雖も、神通露はれず。然りと雖も、悟るときんば、六塵を透脱し、生死を截斷す。故に自ら是れ神通妙用を具足す。是れは外道天魔の、有漏の神通力には非ざるものなり。豁然大悟の人、三大阿僧祇劫を歴すして、頓に佛道を成す。何ぞ別に神通妙用を論せんや。」

問ふ、「見性成佛と即心即佛と、差別ありや也た否や。」

答ふ、「即心即佛とは直に心外に佛なきを示す語なり。若し直に此の旨を承當せば、伶俐の人なり。或は亦、非心非佛とも之れを示す。見性成佛とは、自性を知見し、衆生の命根を截斷して、妙性圓明なることを了知す。然るときんば生死もなく煩惱もなし。故を以て假に名けて成佛となす。佛とは覺なり、從來迷はざることを覺了す。同異なしと雖も、入門差あるに似たり。是の故に兩般の語をなす。」

①六塵・色、聲、香、味、觸、法を云ふ、此の六は六根の對境となりて人の心神を汚し、眞性を覆ひ昏ますが故に塵と云ふ。  
②有漏。煩惱のこと、漏は漏泄の義。  
③非心非佛。僧あり、馬祖に問ふ、「如何なるか是れ佛、」祖曰く、「即心即佛、」又他時一僧あり、同じく問ふ、祖答へて曰く、「非心非佛」と。

問ふ、「性は常住不變にして、諸佛と衆生と一味平等なり。然りと雖も、迷へる衆生は生死の苦あり。然るときんば、一味平等と言ふべからざるものか。」

答ふ、「一味平等といふは、智慧の照す所なり、愚痴の所見にはあらず。

祖師の言句は、門を扣く瓦子なり。未だ門に入らざるときんば、見性成佛の語至極なり。此の門に入得すれば、一切の相を離る。故に成佛も又無得なり。」

問ふ、「顯密の諸宗、皆教理智斷行位因果の八法あり。二乗聲聞は、四禪

八定を修して、火水風の三災の難を離れ、色受想行識を空じて、無餘涅槃に入る。菩薩は三聚の淨戒を持して、慈悲萬行を修し、三賢十聖の位を経て、内外の煩惱を斷す。若し煩惱なき處佛果ならば、何に依つてか三世の諸佛は、眞如法界を出で、生死の欲界に來ることありや。」

答ふ、「諸佛菩薩は衆生を利益するを以て能作となす。若し衆生を利益せずんば、佛菩薩にあらず。三乘は衆生を利益せざるが故に、大乘には是れを解脱の深坑に入ると謂ふ。三賢十聖の菩薩は、修行増進して、重玄門に入り、衆生を度せんがために、寂光の樂土を出で、五濁の惡世に來つて、菩提樹となる。譬へば高原陸地には蓮華を生せず、

①門を扣く瓦子とは方便を云ふ、門を開くためには瓦子の要あり、門開かれば瓦子には用なきなり。  
②四禪定とは明得定、明増定、印順定、無間定をいふなり。八定とは初禪天定、二禪天定、三禪天定、四禪天定、以上色界の四定、空處天定、識處天定、無處有處天定、非想非々想處天定、以上無色界の四定是れなり。  
③無餘涅槃。煩惱障を斷じて得たる涅槃なり、小乘の聖者灰身滅智して此の涅槃に入る。  
④重玄門。事々物々無礙自在なる法門。

卑濕淤泥に蓮華を生ずるが如し。又農人の稼穡を事とするが如き、淨潔乾燥の地には、苗稼を植うる  
 こと能はず、卑濕淤泥に不淨の糞を置きて、米穀の種子を植る、因縁時<sup>①</sup>到つて、陽氣動き甘雨潤し、  
 萌芽長じ、根莖枝葉繁榮茂盛し、稻梁穀米等成熟して、農業事終つて昇平の歌を唱ふ。諸佛の出世  
 も亦復た是の如し。碧落青霄には佛法を建立すること能はず、五濁惡世の穢土に窟弊垢膩の衣を着け  
 て、惡業煩惱の衆生を誘引し、應機說法して正因の種子を下す。因縁時<sup>②</sup>到つて、惠日照し、慈風扇ぎ、  
 法雨瀉ぎ、甘露降つて、道芽萌し、枝葉根莖鬱茂盛長して、菩提樹を生じ、<sup>③</sup>等覺の華を開き、妙覺  
 の果を結び、化導圓滿して、涅槃常樂の妙法を唱ふ。道人も亦一株の木の  
 血身の如し。土に六塵の糞を置き、生靈の種子を下し、色身の苗を植る、  
 性智の芽を萌し、心念の根を生じ、意想の莖を長じ、識神の枝を抽んで、  
 情欲の葉を茂らし、樂の根株を成じ、知見の花を開き、覺悟の果を結び、  
 道業事終へて、無心の樂を唱ふ。凡夫も亦一株の木あり。愚迷薄地にして、  
 貪愛の糞を置き、無明の種子を下し、五蘊の苗を植る、業識の芽を萌し、  
 執着の根を生じ、人我の莖を長じ、詭曲の枝を抽んで、嫉妬の葉を茂らし、  
 煩惱の樹を成じ、妖艶の花を咲き、三毒の果を結び、名利事終へて、<sup>④</sup>五  
 欲の樂を唱ふ。且く道へ、此の三株の木、還つて勝劣ありやまた無や。若

① 等覺の華。等覺は菩薩の最上位にして直に佛位に次ぐ因地の極位なり、故に華と稱す。  
 ② 妙覺の果。妙覺とは自覺、覺他、覺行圓滿の佛にして、佛道修行の最後位なれば之を果と稱す。  
 ③ 樂識。第八識即ち阿賴耶識のこと、樂は動作のこと、此の識無明煩惱に動かされてよく萬有を造作するが故に、斯く名づけらる。  
 ④ 五慾は財慾、色慾、飲食慾、

し人有つて、隻手に此の三株の木を把つて、根に和して一時に拔出して、  
 ① 無陰陽の地に栽培して、直に ② 無影樹となして、まさに是れ大力量の人  
 なるべし。天地と我れと同根、萬物と我れと一體なり。且く道へ、我れは  
 是れ何物ぞ。若し喚んで佛となさば、天地遙かに隔たる。」

① 名慾、睡眠慾なり。  
 ② 無陰陽の地。絶對平等の境界なり。  
 ③ 無影樹。菩提樹なり。

國譯大覺禪師坐禪論 終

國譯大覺禪師省行文

夫れ 幻縁和合して、幻に因つて此の色身を成す。事業修持して、事に従つて其の正理を顯す。理の顯はるゝこと事として達せずといふことなし。身の成すること幻に由つて立す。是を以て先聖此に於て洞明す。機に應じて滯なし、<sup>①</sup> 聰睿の上を超え、品類の先に出づ。惟れ 惠天を動す、遠として届らすといふことなし。汝等此の門に入り來つて、當に自ら觀察すべし。善行積ますんば、令名豈に馳せんや。一法頓に明むれば、萬縁俱に朗なり。間髪髪を剃除して、佛袈裟を掛くるあり。形は僧形に似たりと雖も、志未だ俗志を捨てず、東西に奔走す、眞僞奚んぞ分たん。只だ 塵縁に隨順するを知つて、翻つて 憍憍たることをなす。虚しく信施を消して、徒に 空門に廁はる。忽然として白首到來すれば、返つて 後生に笑を取らる。憶ふ、昔上古の出家の其の形骸を勞し、其の體膚を饑す、命を盡し身を畢ふるまで、爲に斯の事を究む。所以に 一日作さざれば一日食せず。豈に今の坐なが

① 幻縁。色身は四大假和合の因縁によりて成立す、四大分離すれば色身破壞して、又空に歸す、恰も夢幻空華の如し、故に幻縁と云ふ。  
 ② 聰睿。聰明睿智の略、假令聰睿なるも、是れ一人の才智に過ぎざるなり。  
 ③ 惠は徳と同字。  
 ④ 塵縁は俗事なり。  
 ⑤ 憍憍は無知にして且つ意の定まらざるなり。  
 ⑥ 空門は出家のこと。  
 ⑦ 後生は後進若輩なり。  
 ⑧ 一日作さざれば一日食せず。百丈禪師の語なり。

ら愧なきに比せんや。<sup>①</sup> 檀那 四事以て汝を供養す、意何にかある。伊が救拔を望む。今生玄妙に通せず、來世愈牽纏せられん。宗親を負累して同じく地獄に墮せん。此の如きものは、滴水も消し難し。いかに況んや、大厦高樓をや、坐臥何ぞ穩ならん。已に一徳なし、罪萬端あり。樂土未だ成らざるに、<sup>②</sup> 阿鼻先づなる。謹んで 叢林の高士、學法の上人に勸む、各 胸襟を揣り、細に得失を觀せよ。庸輩に隨つて、恣に無知を逞しうすることなけれ。猛く修行を勵み、悟を以て則となし、常に良友に吝つて、以て見聞を益し、廣く琢磨を得ば、道業成じ易し。果してよく此の如くならば、日に萬兩の黄金を消し、銀屋瓊居も分外とせず。若し是の如くならずんば、濫りに僧倫に膺り、佛法の正因、誰に憑つてか紹續せん。親を訪ひ病を問ふも、道に於て極めて妨ぐ。但だ 洞山を學んで、還らすんば益あらん。豈に見すや、青蘿喬松の勢に倚つて、直に千尋に聳え、<sup>③</sup> 紅尾禹門の波に競つて、争つて三級を超ゆ。無情の物だも猶は自ら高きを攀づ、水を弄する魚も 霄漢に騰らんと欲す。況んや人として信に篤き、豈に徹する時なからんや。但だ此の心を堅うせよ、何ぞ達せざるを患へん。

① 檀那は梵語、布施と譯す、轉じて能く布施を行するものを指すに至る、今は布施者の意なり。  
 ② 四事。供養に用ふる四種のもの、飲食、衣服、臥具、湯藥なり。  
 ③ 救拔。苦患を救ひ抜くなり。  
 ④ 阿鼻は梵語、譯して無間と云ふ、八熱地獄の第八にして極苦の處たり、苦に間斷なき故に此の名あり。  
 ⑤ 叢林は僧の住處を云ふ、多くは修禪の道場を指す。  
 ⑥ 洞山を學ぶ。洞山出家してより故郷に歸らず、曰く、「王祥、孟宗が孝に似んよりは、目連の大孝を學ばん」と。  
 ⑦ 紅尾は鯉魚のこと。  
 ⑧ 禹門。瀧の名、三段に分る、之を超ゆれば魚化して龍となる。  
 ⑨ 霄漢。大空なり。

道は外より得るにあらず、己に返つて求めよ。精微を默審して、淵奥を窮通すべし。光陰に限あり、人命存し難し。息を轉すれば鶴髮頭に滿つ、<sup>①</sup> 蹉跎として空しく過すべからず。心源若し濁らば、前路も復た昏からん。病忽ちに相侵せば、能く敵すべきなし。彼の時思ひ付つて悔ゆるとも己に遅々たらん。恨むらくは早く修せざらんことを。江に臨んで船なし、佛法衰替し、人我兼ね行する、今時より盛なるはなし。各自に努力をや。愚、海を逾え漠を越えて、緣此の朝に合ふ。古を擧げ今を明め、寧ろ慚愧なかんや。但諸の後學を勸めて、同じく此の心を究め、以て佛祖慈蔭の恩を報じ、共に檀那供養の徳に酬ゆ、語、華飾なし、勉むるに直辭を以てす。此の如くにして行せば、自他利益せん。

① 蹉跎。説文に曰く、時を失する也と。

國譯大慧禪師發願文

唯だ願はくは、某甲道心堅固にして、長遠不退、四體輕安、身心勇猛、衆病悉く除き、<sup>①</sup> 昏散速かに消し、無難無災、無魔無障、邪路に向はず、直に正道に入つて、煩惱消滅し、智慧増長し、頓に大事を悟つて、佛の惠命を續ぎ、諸の衆生を度して、佛祖の恩を報せんことを。次に冀はくは、某甲、臨命終の時、少病少惱、七日以前に、預め死の至らんことを知つて、安住正念、末後自在に、此の身を捨てて、速に佛土に生じ、面り諸佛に見え、<sup>②</sup> 正覺の記を受け、<sup>③</sup> 法界に分身して、遍く衆生を度せんことを。

十方三世一切の諸佛、諸尊菩薩、摩訶薩、摩訶般若波羅密。

① 昏散。昏は昏沈にして心のくらく沈むこと、散は散亂にして心の靜まらざること。  
② 正覺の記。佛の懸記即ち佛より成佛の豫言を受くること。  
③ 法界に分身す。神通を得て各所に分身說法するなり。

國譯中峰和尚坐禪論

坐禪は別に用心の處なし。只だ十二時中、一切の塵勞妄想の境を放  
 下して、常に自心をして虚空の如くならしめよ。毫髮許りも他念なからし  
 む。若し自心清淨を得れば、還つて不思議不思議。正當與慶の時、如何な  
 るか是れ我が父母未生以前本來の面目と、是の如く看よ。若し工夫一片  
 にならば、自然に悟入あることを得ん。何をか坐禪と名く、外一切善惡の  
 境界に於て、心念起らざるを名けて坐となし、内自性の動せざるを見るを  
 名けて禪となす。如今學道人、此の心體を悟らすして、便ち心上に於て心  
 を生じ、外に向つて佛を求め、相に着して修行す。皆是れ惡法にして、  
 菩薩の道にあらず。

①塵勞。心を勞する塵の意、煩悩のこと。妄想はまことならぬ分別心、みだりなるおもひ。  
 ②放下。打遣ること、打捨て、顧みざること。  
 ③一片は他念を離へず三昧に入ることを。  
 ④相に着す。外相に執着すること。

大覺禪師坐禪論

夫坐禪大解脫法門也。諸法從是流出。萬行自是通達。神通智慧德從此內起。人天性命道自此內開。諸佛已從此門出入。菩薩行即入此門。二乘猶在半途。外道雖行不入正路。凡顯密諸宗。不行此法。不有成佛道者也。問曰。坐禪爲諸法根源。意旨如何。答曰。禪佛內心也。律佛外相也。教佛言語也。念佛佛名號也。是皆從佛心出。是故爲根本也。問曰。禪法無相無念。靈德不露。見性也無證據。以何可信之。答曰。自心與佛心一味。豈非靈德。我心我不知。喚誰爲證據。即心即佛外。求何證據。問曰。能修一心法也。修萬行萬善功德。爭可比之。答曰。頓覺了如來禪。六度萬行體中圓。然則禪一法。備一切諸法。豈不見道。三界唯一心。心外無別法。縱修萬行。不知心法。不可得悟。若道不得悟而成佛。豈有其理乎。問曰。此法何可修行。縱爲修行。不得開悟。成佛不定。若不定。雖作修行。何有益。答曰。此宗甚深微妙法門也。若有一經其耳。長成菩提。勝因。古人云。此聞不信者。福超人天。學不得者。終到佛果。云云。此法佛心宗也。佛心自本無迷悟。正如來妙術也。縱雖不得悟。一座坐禪。一座佛也。一日坐禪。一日佛也。一生坐禪。一生佛也。未來亦如是。只如是信者。是大機根人也。問曰。若如是。我也可修行。云何安心。云何用心哉。答曰。佛心一切無着相。以離相爲實相。行住坐臥。四威儀中。以坐爲安穩義。以端坐思實相云也。問曰。端坐思實相。義微細說之。答曰。端坐如來結跏趺坐。思實相所謂坐禪也。結法界定印。身心不動。



眼開半目守鼻端當見一切有爲法如夢幻泡影莫繫念頭問曰結足結印如來威儀開半目守鼻端何事答曰開眼遠見被侵紛飛境心散亂塞目又落昏沈境心中不明也眼開半目則念不忿忿身心一如明察時生死煩惱不可近傍是名立地成佛大機大用云也問曰雖開如是事尚以信心難及讀誦經呪積其功持齋持戒唱名號累其德專有憑只不爲何事安禪可有奇特乎答曰如是疑云生死業如是疑云煩惱也行一切法無所得心名爲甚深般若若智慧也此智慧能切生死根源利劍也修善根願其果報凡夫迷也菩薩修善根不求其果報向大慈大悲修善根故成菩提資也願果報修善根成人天小果入定生死業也問曰不聚善根功德爭可成萬德圓滿佛耶答曰聚善根功德歷三大阿僧祇劫當成佛也行因果不二法一生成佛也明自心悟自性人見自己本來佛也非今始成佛問曰見性成佛人不憑因果不可修善根乎答曰見性成佛人雖修善根爲利益不爲果報教化衆生故教因果也爲我身無所得故不憑功德一切無心也問曰無心者如何若一向無心誰見性誰悟道誰又可爲說法教化乎答曰無心者言無一切愚痴心也非言無辨邪正底心也我不思衆生亦不望佛又不思迷不求悟不從人尊敬不望名利養聞不厭毒害怨讎付一切善惡不起差別念言無心道人也故云道無心合人人無心合道云云問曰持齋持戒讀誦經呪唱名號功德有勝劣無答曰持齋離食貪欲來生當得大福德持戒又爲休惡心生善心也有善心者生人天中位尤高也讀經呪者護持佛法故此人來世當得大智慧也唱名號歸佛故當來必生佛土也又此無心佛心也佛心功德言語不能及思量不可到實不可思議也問曰如此善根面面其功德

無疑無心功德尚以不審答曰學佛威儀傳佛言語唱佛名號有功德又是無心道人可有功德若道無心無功德餘行也不可有功德也一切善根功德天上人間因緣也無心即是頓證菩提道也功德不足言之實一大事因緣生死煩惱自消滅身心一如也卽心成佛有何疑乎故人云供養三世諸佛不如供養一無心道人云云實是唯佛與佛境界也凡夫二乘非可測處者也問曰諸教不說無心亦不讚嘆由何宗門貴之乎答曰諸教不無其說或說言語道斷或曰不可說或畢竟空或一大事因緣或又說諸法寂滅釋迦掩室淨名閉口是豈非示無心乎影響菩薩已證智故佛不說之二乘難及故佛又不說之故法華經云無智人中莫說此經此意也諸教雖有八萬四千法門不出色空二法也一切有形相者皆色也身也不顯形相者皆空也身有形故云色心無形故云空也一切經皆不離此色空二法是不可說無心境界所以不讚嘆斯事言語不及故云教外別傳也問曰則此身可爲迷乎又可爲悟乎又心是何物迷悟根本不可不知之又心在身內耶在心外耶從何處起答曰四大五蘊色身遍滿十方一切衆生爲根本因緣和合則建立身體是名生果報遷謝則四大分散是名死色相有凡聖心體無迷悟雖然假迷名衆生悟名諸佛迷悟只因安心真心無迷悟生佛本因一心迷悟了本性則畢竟無有凡聖差別故首楞嚴經曰妙性圓明離諸名相無有本來世界衆生云云問曰心性本無迷若然迷情從何處起答曰妄念若起迷隨來迷來故煩惱又生妄念若滅迷則去迷去故煩惱又滅煩惱生法也爲生死種菩提滅法也爲寂滅樂迷則諸法皆煩惱悟則諸法皆菩提也世人不知此迷悟根本壓生死念不起而思一念不生又是爲無心猶是生死念也

非無心非寂滅以念息念生死相續也問曰小乘墮空理不知無心大乘菩薩可得此無心否答曰菩薩至十地猶有惑智二障故不得無心一惑障至第七地有求法心故為障至第十地有覺照心故為障至成等正覺時合此無心云云問曰菩薩尚至十地不知之初心學人爭可合無心答曰大乘不思議也直截一念根源頓悟者有之也教家立三賢十聖位為鈍根機也利根人初發心時便成正覺直成佛者有之至十地等覺合無心與即今見性成佛無心之理無有差別問曰見性成佛者如何道性者何物見者何見以智可知歟以目可見歟如何答曰學經論得智見聞覺知分別智也此修行不用之回光返照知見本有自性名惠眼也見性之後見聞覺知也可受用問曰知見本有自性者知見可知本有自性者如何答曰一切眾生本來有性故扶起自體此性從無始以來不生不滅無色無形常住不變是名本有自性此自性與一切諸佛一味平等故名佛性一切三寶六道眾生以此性為根本成就一切法問曰回光返照者如何答曰照外諸法自己光明回返照內自己云也心明如日月光無量無邊照內外一切國土光不及處闇是名黑山鬼窟一切鬼神住其內鬼神能害人心法亦復如是心性智光無量無邊照一切境界光不及處闇是名無明陰界一切煩惱住其內煩惱能害人智心光也妄念影也光耀物照云心念不遷境界向本性言回光返照又言遍照也遍照當體迷悟未露處也今時人以妄念思本心以煩惱為樂何時離生死耶問曰坐禪以一念不生為省要以念止念即是似以血洗血如何答曰一念不生所謂心法本體也非止念又非不止念但是一念不生也若合此本體是名法性如來然則坐禪亦無用也無迷無悟豈有念乎若不知此本

體不可得不生縱雖押念不起皆是無明也譬如石壓草不久又生綿密可工夫不可容易問曰或人云當向一念不生處如何答曰一念不生者全無生滅去來相指示語也生死從念起若不知念起處不可知生死根本眾生十二時中被使煩惱念背本有性若復妄念雲晴心性月彰已前所憎念還皆成智慧乃以此念說法可教化眾生古人云諸人被使十二時我使得十二時云云問坐禪時念起過止又過云如何答未見性時起止皆過也佛經或說不起妄念或說亦不息滅皆是為令知本性語也知本性則修行無用也迷妄病除則療治無益也雖然迷情病起則用修行療治念起病不續藥也問曰縱雖念起念無自性有何過乎答曰雖無自性起便有過猶如夢中事覺後知其虛妄豈云無過乎起過成夢眾生妄見也一旦聞佛法起信心殊勝事也雖然無真實道心人由工夫疎不知心過偶押小小念不知大大念若不截根源縱有結緣分難出離生死問曰一切善惡都莫思量云云付善惡無思量尤為坐禪用心小小大大念者云何答曰一切善惡都莫思量云直截語也坐禪時計非可用之若到此田地行住坐臥皆禪也必不執坐相祖師云行亦禪坐亦禪語默動靜體安然佛經云常在於其中經行若坐臥云云小小念者付目前境界起念也大大念者貪欲嗔恚愚痴邪見憍慢嫉妬名聞利養等念也坐禪時志薄人雖收小小念如此惡念不覺在中心中是名大大念棄捨此惡念直名截根源直截根源則煩惱成菩提愚痴成智慧三毒成三聚淨戒無明成大智法性何況小小念乎佛語若能轉物即同如來者此意也但能可轉物莫被轉於物問曰若能轉物即同如來者物者何物轉者何事答曰物者萬物也轉者體脫也轉物者就一切境界不遷心返向

本性境不礙心。天魔鬼神煩惱生死不可得便。是云轉物於物不遷。心用心也。佛見法見尚以可截。何況妄念。截心雖似念。念是正念也。正念名慧念。是入正見智慧也。問曰。煩惱菩提從一心起。分明也。自何處起。始耶。答曰。見色聞聲嗅香嘗味覺觸知法。六根德用也。附此境界。分善惡辨邪正。底智慧也。於此立人我。起愛憎。皆妄見也。依此妄見。成着相名迷。從此迷起。色受想行識五蘊。是名煩惱。以煩惱建立衆生身體。故好殺生偷盜邪淫妄語等惡行。終墮三惡道。皆是從妄念起。此妄念纔起時。直轉妄念向本性。卽成無心。已得安住無心。五蘊身卽成五分法身如來。是謂應無所住而生其心。如是用心修行大用也。問曰。久積坐禪功。工夫純熟。人不可有煩惱邪迷之心。始爲修行人。爭可盡煩惱乎。答曰。不厭煩惱。只可淨心。古人云。學道須是鐵漢。着手心頭便判。直趣無上菩提。一切是非莫管。著手心頭者。批判心邪正。可知。心誤名智者。若有智慧無迷。譬如自昔不入日月光。闢穴入燈。而昔闢不去外邊。俄成明也。無明煩惱闇得智慧光。不待去而去也。夜虛空闇。雖然日光現。則其虛空成晝明也。心法亦復如是。迷闇也。悟明也。智慧光照。則煩惱暗。忽成明。菩提別無有二法。問曰。照煩惱闇。依智慧力。無智慧不可有菩提。然則爭可得此智慧。答曰。自己智光自明明。雖然被覆妄想失之。是故起迷。譬如人見夢時。何事爲真實相。覺後無一事。如夢妄想。覺後見之。從本無之。衆生迷故。以妄爲實。問。悟者日比不知事。俄知之。可知過去未來事否。答。妄見皆盡。大夢俄覺。知見佛性。是名大悟大徹。是等思量分別不測處也。識過去未來事。神通力。其因修行動力。非可謂大悟也。天魔鬼神。外道仙人等。皆是有神通。昔曾修難行苦行德也。雖有此德。不離邪見。不入佛道。問。悟道得法人。不具神

通。則有何德用乎。答。此身以過去愚迷。建立故。縱見性成佛人。神通不露。雖然悟則透脫六塵。截斷生死。故自是具足神通妙用。是非外道天魔有漏通力者也。豁然大悟人。不歷三大阿僧祇劫。頓成佛道。何別論神通妙用乎。問。見性成佛與卽心卽佛。有差別也否。答。卽心卽佛者。直示心外無佛語也。若直承當此旨。俗侂人也。或非心非佛示之。見性成佛者。知見自性。截斷衆生命根。了知妙性圓明。然則無生死無煩惱。以故假名爲成佛。佛覺也。覺了從來不迷。雖無同異。似入門有差也。是故成兩般之語也。問。性常住不變。諸佛與衆生。一味平等也。雖然迷衆生有生死苦。然則不可言一味平等者乎。答。一味平等者。智慧所照也。非愚痴所見。祖師言句扣門瓦子也。未入門時。見性成佛語至極也。入得此門。離一切相。故成佛又無得也。問。顯密諸宗。皆有教理智斷行位因果八法。二乘聲聞。修四禪八定。離火水風三災難。空色受想行識。入無餘涅槃。菩薩持三聚淨戒。修慈悲萬行。經三賢十聖位。斷內外煩惱。若無煩惱處。佛界依何有三世諸佛。出真如法界。來生死欲界乎。答。諸佛菩薩。以利益衆生爲能作。若不利衆生。非佛菩薩。三乘不利益衆生故。大乘是謂入解脫深坑。三賢十聖菩薩。修行增進。入重玄門。爲度衆生。出寂光樂土。來五濁惡世。成菩提樹。譬如高原陸地。不生蓮華。卑濕淤泥。生蓮華。又如農人事稼穡。淨潔乾爆地。不能植苗稼。卑濕淤泥。置不淨糞。植米穀種子。因緣時到。陽氣動。甘雨潤。萌芽長。根莖枝葉繁榮茂盛。稻梁穀米等成熟。農業事終。唱昇平歌。諸佛出世。亦復如是。碧落青霄。不能建立佛法。五濁惡世。穢土。着龕弊垢膩衣。誘引惡業煩惱衆生。應機說法。下正因種子。因緣時到。慧日照。慈風扇。法雨瀉。甘露降。道芽萌。枝葉根莖鬱茂盛長。生菩提樹。開等

覺華結妙覺果，化導成滿，唱涅槃常樂妙法。道人亦如一株木血身，土置六塵，下生靈種子，植色身苗，萌性智芽，生心念根，長意想莖，抽識神枝，茂情欲葉，成樂根株，開知見花，結覺悟果。道業事終，唱無心樂。凡夫亦有一株木，愚迷薄地，置貪愛糞，下無明種子，植五蘊苗，萌業識芽，生執着根，長人我莖，抽諂曲枝，茂嫉妬葉，成煩惱樹，笑妖艷花，結三毒果，名利事終，唱五欲樂。且道，斯三株木，還有勝劣也無？若有人，隻手把此三株木，和根一時拔出，栽培無陰陽地，直作無影樹，當是大力量人。天地與我同根，萬物與我一體也。且道，我是何物？若喚成佛，天地遙隔矣。

### 大覺禪師坐禪論終

### 大覺禪師省行文

夫幻緣和合，因幻而成。此色身事業修持，從事而顯其正理，理之顯也無事不達，身之成也由幻而立。是以先聖於此洞明，應機無滯，超于聰睿之上，出于品類之先。惟惠動天，無遠弗届。汝等入此門來，當自觀察，善行不積，令名豈馳。一法頓明，萬緣俱朗。間有剃除鬚髮，掛袈裟，形雖似僧形，志未捨俗志。東西奔走，真偽奚分。只知隨順塵緣，翻成憶憶，虛消信施，徒厠空門。忽然白首到來，返被後生取笑。憶昔上古出家之勞，其形骸饑，其體膚盡，命畢身，爲究斯事，所以一日不作，一日不食。豈比今坐無愧，檀那四事以供養汝，意在於何？望伊救拔，今生不通玄妙，來世愈見牽纏，負累宗親，同墮地獄。如此之者，滴水難消，何況大厦高堂，坐臥何穩，已無一德。罪有萬端，樂土未成。阿鼻先就，謹勸叢林高士學法上人，各揣胸襟，細觀得失。莫隨庸輩，恣逞無知，猛勵修行，以悟爲則。常咨良友，以益見聞。廣得琢磨，易成道業。果能如是，日消萬兩黃金，銀屋瓊居，不爲分外。若不如是，濫膺僧倫，佛法正因，憑誰紹續。訪親問病，於道極妨。但學洞山，不還有益，豈不見青蘿倚喬松之勢，直聳千尋。紅尾競禹門波，爭超三級。無情之物，猶自攀高，弄水魚欲騰香漢。況人篤信，豈無徹時乎？但堅此心，何患不達。道非外得，返己而求。默審精微，窮通淵奧。光陰有限，人命難存。轉息鶴髮滿頭，不可蹉跎空過。心源若濁，前路復昏。病忽相侵，無能可敵。彼時思忖，悔已遲遲。恨早不修，臨江無船。佛法衰替，人我兼行。無盛今時，各自努力。

愚逾海越，漢緣合此朝，舉古明今，寧無慚愧。但勸諸後學，同究此心，以報佛祖慈蔭之恩，共酬檀那供養之德。語無華飾，勉以直辭。如此而行，自他利益矣。

### 大慧禪師發願文

唯願某甲，道心堅固，長遠不退，四體輕安，身心勇猛，衆病悉除，昏散速消，無難無災，無魔無障，不向邪路，直入正道，煩惱消滅，智慧增長，頓悟大事，續佛慧命，度諸衆生，報佛祖恩。次冀某甲，臨命終時，少病少惱，七日已前，預知死至，安住正念，末後自在，捨了此身，速生佛土，面見諸佛，受正覺記，分身法界，遍度衆生也。

### 中峰和尚坐禪論

坐禪別無用心處，只十二時中，放下一切塵勞妄想境，常令自心如虛空，毫髮計使無他念，若得自心清淨，還不思善不思惡，正當與麼時，如何是我父母未生已前本來面目，如是我若工夫一片成，自然得有悟入，何名坐禪，外於一切善惡境界，心念不起，名為坐，內見自性不動名為禪，如今學道人，不悟此心體，便於心上生心，而向外求佛，着相修行，皆是惡法，非菩薩道。

大正十年四月十五日印刷  
大正十年四月廿五日發行

【國譯禪宗叢書】 第拾貳卷

編輯者

東京市神田區錦町一丁目十六番地

國譯禪宗叢書刊行會

右代表者

宮下軍平

印刷者

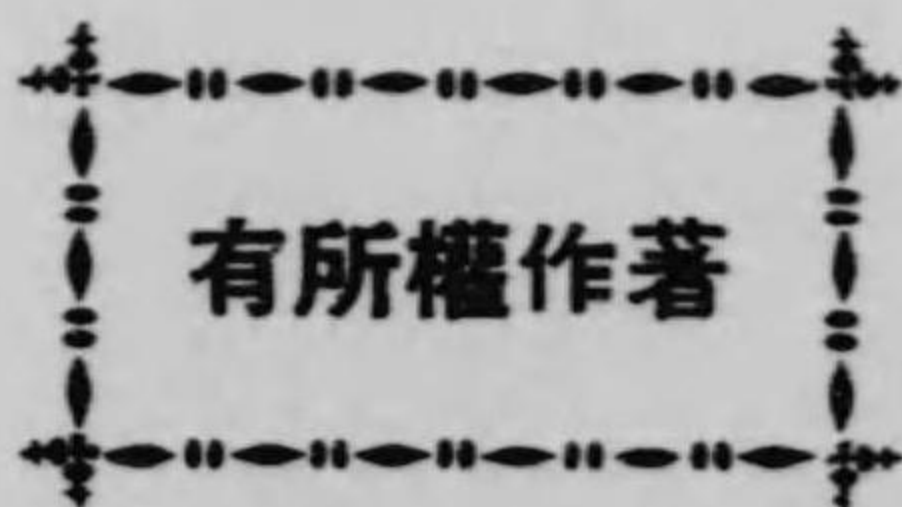
東京市神田區錦町三丁目一番地

中島藤太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目一番地

神田印刷所



有所權著作

((非賣品))

### 發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番地(二松堂書店內)

國譯禪宗叢書刊行會

電話神田二四七八番  
振替東京四六〇一六番

240748

發行所

東京市丸の内區

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

東京市丸の内區

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

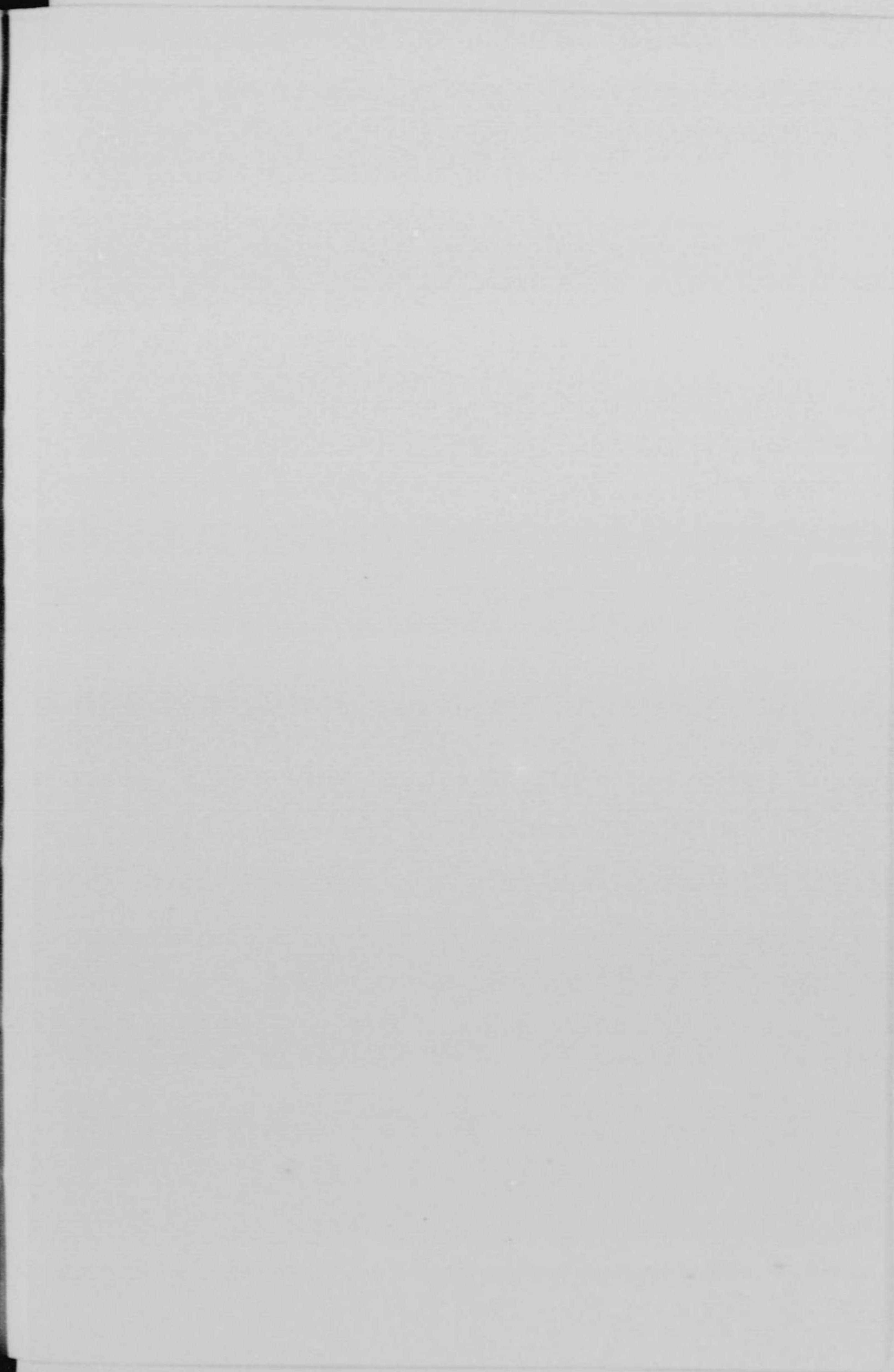
丸の内區丸の内

丸の内區丸の内

大正十一年四月廿五日發行  
大正十一年四月廿五日發行

丸の内區丸の内

丸の内區丸の内





終